絵手紙に託す思い

季節を告げる絵や添えられた文字から、送り主の温かいメッセージが伝わる絵手紙。惣領郵便局を訪れた時、壁面の一角に紹介されている、絵手紙同好会「野ばらの会」の作品群に心を癒やされる人も多いことでしょう。会を主宰するのは、馬水南に住む倍澄香（ばいすみか）さんです。

長年、日本郵政に勤務した倍さんは亡き父親と、いつも仲睦まじい夫、そして息子さんも同職（現役）という「郵政一家」です。倍さんは35年務めた職場を54歳で早期退職した時、長く胸につかえていたことがありました。「ずっと家と職場の往復で、住み慣れた地域のために何も貢献できていない…と思ったんです」と振り返ります。

そこで倍さんは、退職した翌月から絵手紙教室に通うことにしました。そして60歳の時に公認講師の資格を取得。そこからはせきを切ったように熊本市内の障害者施設をはじめ、町内の高齢者施設、サロンなどを熱心に巡り、ボランティアで絵手紙の楽しさを伝えてきました。

「絵手紙には送る相手の顔を思い浮かべ、会話をするような言葉を添えましょう、とお伝えしています。上手に描けなくてもいいんです。思いが込められたものは人の心を温かく包みます」と言う倍さんが手掛ける絵手紙は、ハガキ以外に紙皿や板皿、畳表などの素材を使ったりとユニーク。箱あんどんに描かれた作品などは実に情緒豊かです。

上／大好きな絵手紙に向かっている倍さん
左／紙皿や板皿などに絵手紙を描いて

倍さんの作品の一つ。箱あんどんに描いた提灯の絵

穏やかな人柄の夫の英文（ひでふみ）さんと

「絵手紙を通じて皆さんに喜んでいただける。笑顔になってくださる。それが私の『心の貯金』になります」と話してくれた倍さんの思いが心に残りました。

“まち”をつくろう！

馬水地区はかつては一つの区としてまとまっていましたが、18年前に馬水南の初代区長に就任したのが、松本稔（まつもとみのる）さんです。「40年ほど前、私たちがここに来た頃は戸数も少なかったものです。平成18年に公民館ができ、皆さんでここに”まち“をつくろう！子どもたちの古里をつくろう！と協力し合いました。その精神は今も残っています」と松本さんは話します。

松本さんは木山校区の寺迫で生まれ育ち、18歳で自衛隊に入隊。退官後は熊本で再就職し、その後はボランティアで防災活動などに尽力してきました。初代区長に就任してからは、地域の交流を推進しました。「馬水南は移住者が多かったから、人が集い合うイベントや老人会を発足して、交流のきっかけづくりに努めました」と振り返ります。

現在はご隠居生活の松本さんですが、今年で90歳とは驚きの若さです。「朝の5時半に起きて秋津川のほとりで太極拳をします。それから散歩して朝日を拝み、家に帰って朝ご飯。これが毎朝の日課」と笑う松本さんは、20代の頃から始めたという謡曲の師範でもあります。そこで祝言の歌を一節、お願いすることに。

♪高砂や～
この浦舟に帆を上げて～
月もろともに出で潮の～（続く）

重厚な張りのある声に、歌の物語が浮かび上がるようです。しかし紙面ゆえ、お伝えできないのが残念です。

90歳になる松本さんは、今もダンディー

馬水地区のどんどやの櫓は高いと評判。13年前のどんどやの様子（松本さん提供）